

第Ⅵ章 結 語

最後に石のカラト古墳および音乗谷古墳の築造年代を含め簡単にまとめておきたい。

石のカラト古墳の築造年代を考察するうえで、研究者によって何を重要視するかに大きな違いが認められる。たとえば、石槨の断面形態を重視する立場をとるならば、その天井の高さの減少する順に並べることになる。そうすると、石のカラト古墳はキトラ古墳に併行して、それより遅れてマルコ山古墳、そして高松塚古墳が築かれたことになる。キトラ古墳と高松塚古墳のこの先後関係は、壁画の題材を重視して、キトラ古墳には見られなかった人物群像の加わる高松塚古墳をそれより新しくする意見と合致する。

いっぽう、出土土器を重視する立場では、石のカラト古墳から出土した須恵器を古墳築造時の使用品と判断し、奈良時代前半に下ると判断する。ただし、古墳完成後の外周平坦面での溝の増設が確認され、その判断材料の須恵器が心もとないことはすでに述べたとおりである。このほか、都城の葬地を考える視点で、平城宮の時期に当然下げて考えるべきだという立場もある。

こうしたさまざまな見解のある中で、本報告では、従来から言われてきているようにマルコ山古墳、キトラ古墳、高松塚古墳とそれぞれ類似点を多く所有していることを確認した。その中で、とくにキトラ古墳との関係が墳丘、石槨双方において強いことがわかる。

いっぽう、墳丘構築法での土嚢積みの工法は、葺石の採用、比較的緩い平坦地に築かれた選地の違いとも関連し、異なる造墓集団の存在を推定させる。その理由に上円下方墳という形態が大きく関わっていることが明らかになった。

そして金・銀製玉や金箔など注目すべき遺物の存在も石のカラト古墳の重要性を考えさせるものであった。それらを、積極的に評価すると、平城宮遷都前後の短い時間幅の中で石のカラト古墳が造られたことが考えられよう。それにともない他の3古墳のいずれかが奈良時代に下がる可能性もけっして否定できないだろう。これが元明太上天皇が終止符を打とうとした墓制であったに違いない。しかし、実際はその後も石材を使用するような埋葬施設を有した古墳が造られたことは、鎌倉時代の聖武天皇墓の盗掘記録から窺える。

対して、音乗谷古墳は全長約22mの帆立貝形前方後円墳であることがほぼ確定した。その多彩な形象埴輪の内容は、大阪府今城塚古墳や和歌山県大日山35号墳など近年明らかになりつつある6世紀の大型古墳の埴輪配列と対比できる中小古墳での樹立例として、今後の畿内の埴輪を考える上できわめて重要な基本資料といえる。円筒埴輪・玉杖形埴輪に見る特徴は明らかに6世紀前半に収まることを示しているが、採集された須恵器は、6世紀前半のものに6世紀後半のものが混ざっており、6世紀後半に追葬ないし追加の祭祀がおこなわれたと見られる。

墳丘の掘割りに面する前方部上に置かれた形象埴輪が、失われた人物埴輪各種を含め全体としてどのようなものであったのか大いに興味があるが、そこに樹立された埴輪については、奈良山丘陵の南で操業を開始していた一大埴輪生産地である菅原埴輪窯跡群との関係を含めてさらなる検討を加えていく必要があるだろう。